東京農業大学　図書館

大学史資料室通信

第11号
2016.11.1

『石組園生八重垣伝』 全2巻2冊(＊)

図書館所蔵の造園関連貴重書の紹介
その二『石組園生八重垣伝』

東京農業大学図書館には、造園関連の貴重書が数多く登録所蔵され、その内の三件は図書館HP「貴重書コレクション」の中で、電子画像データに変換され公開されている。

三件共に、その原本が秋里籬島の手になる江戸時代の版本である。前回(第十号)に紹介した、『都林泉名勝図会』(みやこりんせんめいしょうずえ：一七九九、五巻六冊)、に続き、今回は、版行年代の古い秋里籬島『石組園生八重垣伝』(いしぐみそのうやえがきでん：一八二七、乾坤・二巻)を紹介したい。

江戸時代の版本のため、原文には毛筆草書体風の文字を用いているが、多くの図を付して解説しているので比較的わかり易い。また、上原敬二により『石組園生八重垣伝　解説』(加島書店、一九七三)として活字化され、解説も付されているので参考にしてほしい。

さて、この紹介記事冒頭に掲げた写真は、この本の表紙(右)、そして中と左は表紙を開いての見開く頁(表紙裏と内表紙)である。後に詳説するが、この本を読み進む楽しみの一つが、文章・図版の編集構成にある。まずは、表紙を開くと右に目を引くのが書名。丹精な書体とバランスにて構成されている。

そして左頁には「衝立（ついたて）」の図柄。内表紙は、日本の家屋の入口である「玄関」に似せている。本の入口の意味か。日本家屋の玄関口に置かれる衝立は、目隠しのための障壁、すなわち外からの視線が室内の奥に直接届くことのないよう遮り・限る目的をもつ。また同時にこうした衝立は、外からの訪問者が最初に目にする屋内調度品であることからも、もてなしに相応しい美を期待される。

この衝立には、四言詩が記されその意味の概略は「長短・縦横、大小りっぱな仕事は、普通でないほどに積み重ねた技芸、囲んで治める技は昔からのしきたり。」とでもなろうか。

そして、衝立の後ろに「鳳凰（ほうおう）」と「麒麟（きりん）」が描かれているので、向こう側は聖なる場所を意味している。つまり、この衝立が鳳凰と麒麟のいる聖なる地、清浄な場所の境、限り、となっていることを意味している。こうした清浄を限る「垣」の意味は、二頁ほどめくってこの本の前書「八重垣の詳誌」にさらに詳しく紹介されている。

『石組園生八重垣伝』（一八二七、文政十）

農大図書館の貴重図書書誌情報の解説には次のように記載されている。

「本書は上下二巻からなり『山水庭相談』の中から籬根の作り方を主に採択し又石組の事は『築山庭造伝』を取り入れ、編纂したものである。其他橋、門についても記述され築庭に関する名著である。」

乾坤二巻からなる版本で、本の大きさは縦約二二センチメートル、横約十五センチメートル。内容は、庭を構成する主要な要素である垣、橋、木戸、井戸、石組、飛石、延段、灯篭、手水鉢などの図とその説明である。

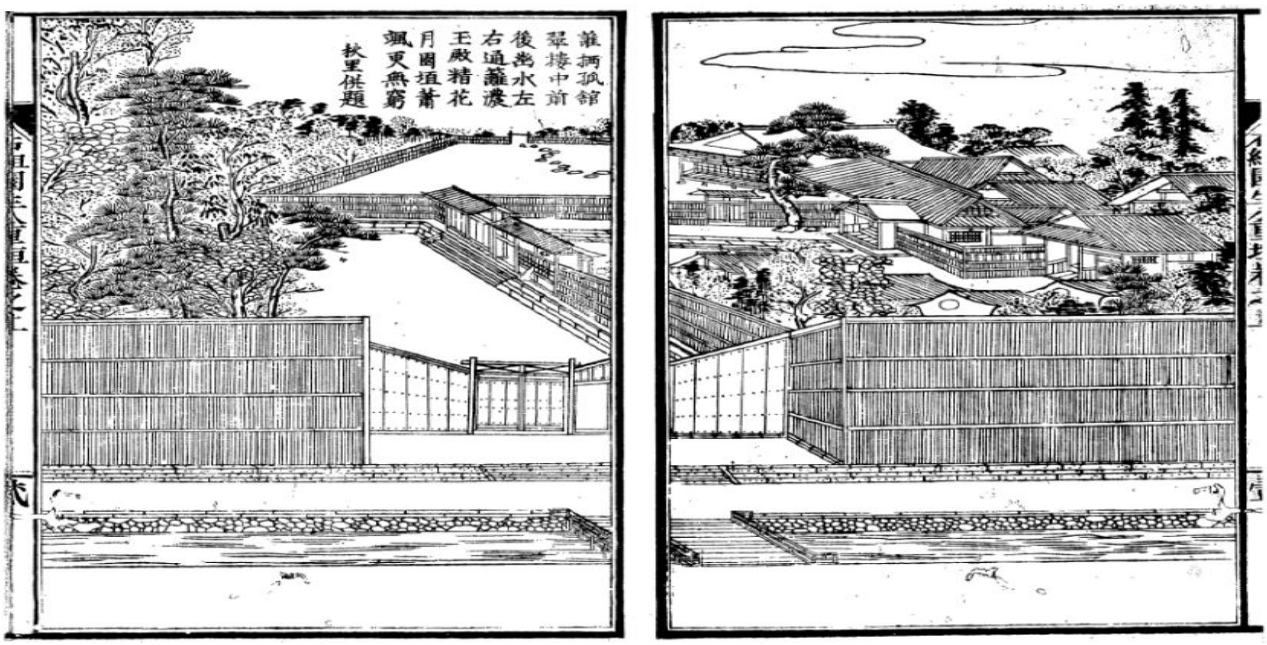
次回紹介予定の秋里籬島『築山庭造伝　後篇』の版行が一八二八年。翌年であることを考えると、両者は同時期に構想され技術的な詳細を先行させて出版したとも思える。

なお、著者である秋里籬島については、前回（第十号）『都林泉名勝図会』の紹介の際に載せておいたので参考にしてほしい。

『石組園生八重垣伝』刊行の意図

乾巻の内表紙をめくると、次に左右見開きで登場するのが、ここに載せた家屋と庭の鳥瞰図、前書（まえがき）の前頁である。

当時の家屋周辺には、囲み・区切りのための様



様々な垣根が画かれた巻頭の家屋と庭の鳥瞰図（＊）

々な種類の垣根が、たくさん用いられていることを示した図である。そしてこの図の次には「八重垣の詳誌」(前書)、「目録」(目次)と続く。

さて、この図についても、もう少しよく見てみよう。鳥瞰図なのか？透視図でもなさそうな、よく見ると不思議な構図である。しかし、前の頁構成でこの本に載る絵図の意味深さを知れば、それに続く次の頁でもあり、以下の解釈ができる。

一番手前、正面に画かれる垣根は建仁寺垣。現在も日本の庭の区画に最も厳格な垣根として重宝されている。図手前、左右横幅の三分の二は立子(垣根の縦の素材)入りの建仁寺垣である。よく見れば、図中に画かれる垣根の多くがこの建仁寺垣で、しかも目立つように画かれている。また、手前の左右一直線にのびる、垣根のこちら側(読者側)とむこう側(家屋と庭側)には段差があるような、区画があるような、まったくの別世界のように画かれていることに気づく。

この画の妙な様相の由来である。そして、左手前に大きく画かれる樹木群、右手奥には樹形の明確な樹木、さらに中央やや左には遠景となる樹木群。見るものの視線と関心を左手前から、右手へ、そして中央奥へと導く。気づけば視線が導かれるここあそこが、垣根で区切られている。最奥に見える場所にも垣根と門が見え、正面手前の門、そしてその先(上方)に、いくつかのこの画の奥行方行への線がまとまっていく。いわゆる透視画法的な描法も取り入れられており、その視線のまとまりは中央やや左上に導かれる。

そこに「秋里併題」、すなわち画に合わせて秋里が題す、と記す漢詩をレイアウトしている。この詩を読み下すと、おおよそ次のような意味である。

「だれ(何)がこの館を飾るのか。まん中に緑が映える楼閣。後ろは悠然とし左に水。右に様々な垣根を設けた通路。御殿に近く咲く花々。月が庭の淋しさを補う。極まりなく風吹く音がただよう。」

この図の次からは三頁にわたる「八重垣の詳誌」(前書)である。「垣」の類語である墻、屏、冊、籬、などの語句をあげ、その役割、使用例を述べる。特に、神仏に関連づけつつ「不浄を限る、不浄を隔てる垣根」の意義、役割を強調する。この頁に至り、その詳誌を読み、前頁までの画や詩句表現の意味がよく理解される。

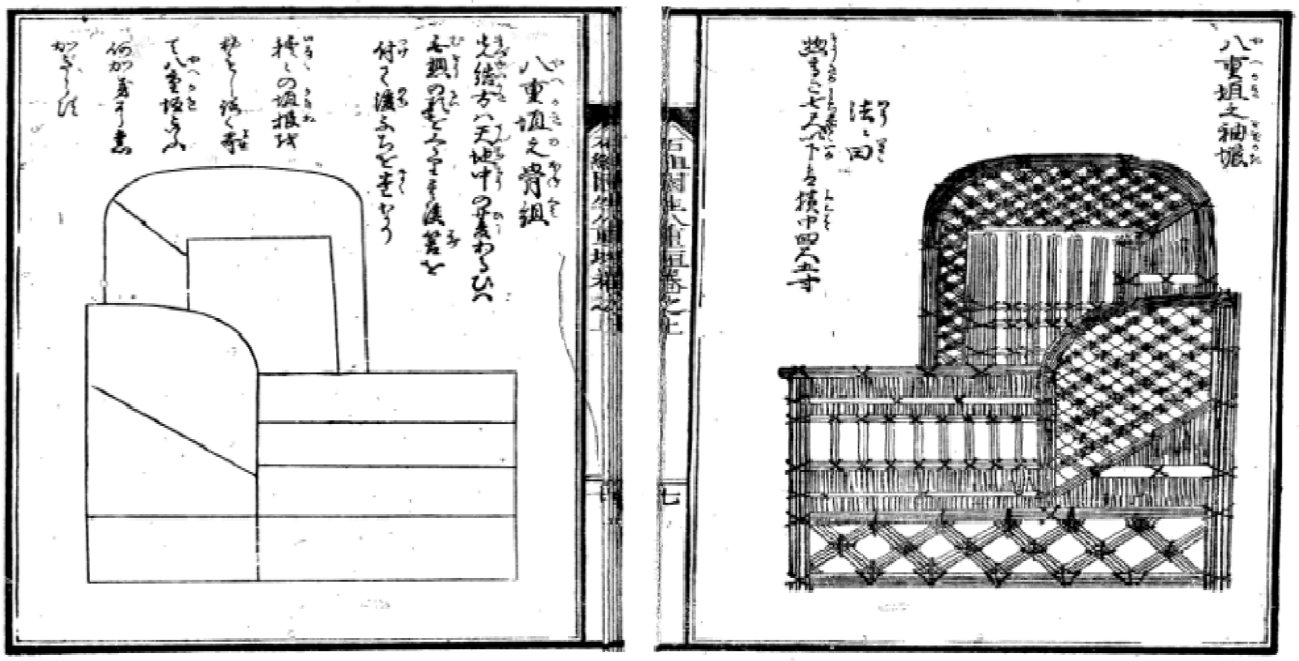
その重要な役割を担う「垣根」について、「垣に品と色と其数今はあまたあれば、是をここに絵図をあらわし、その結方ひとつひとつに教え、自ら造る事をさとし、奥にはまた庭に置くべき石のくみかたをくわしく画きてつたえてさとし、何によらず庭に用ゆる品をことごとく教ゆるも、神と世を祠る事をかしこくせむものと一軸を述べて、なづけて石組園生の八重垣、と題してふたつの文とはなしぬ」と記述する。

つまり、最近は垣根の種類が数多くあるので、それを絵図にしてその作り方を示して自身で造れるようにし、またさらには「庭に置くべき石の組み方を詳しく画き」「庭に用いる品」を全て教える意図をもって「石組園生の八重垣」と題して二巻にまとめた、というのである。まさに、秋里の生きた時代、最先端の作庭技術書という意図をもっての出版であった。

垣根など絵図の種類・数と描法

乾坤二巻に採録されている絵図の種類とその数を掲載順にあげると、垣根三十八種、庭戸八種、庭橋十三種、庭門・庭木戸六種、手水鉢・井戸など十一種、庭石・石組三十五種、軒内・飛石・延段など十五種、つくばい・水鉢六種、石灯篭四種という数になる。

乾巻(上巻)は「八重垣之袖垣」で始まり、「巌海橋之図」で終わる。坤巻(下巻)は「八橋之図」で始まり、図としては「内庭手水鉢之図」で終わる。この本の編集の仕方、図の掲載順と方法が興



八重垣之袖垣(裏·表)(＊)

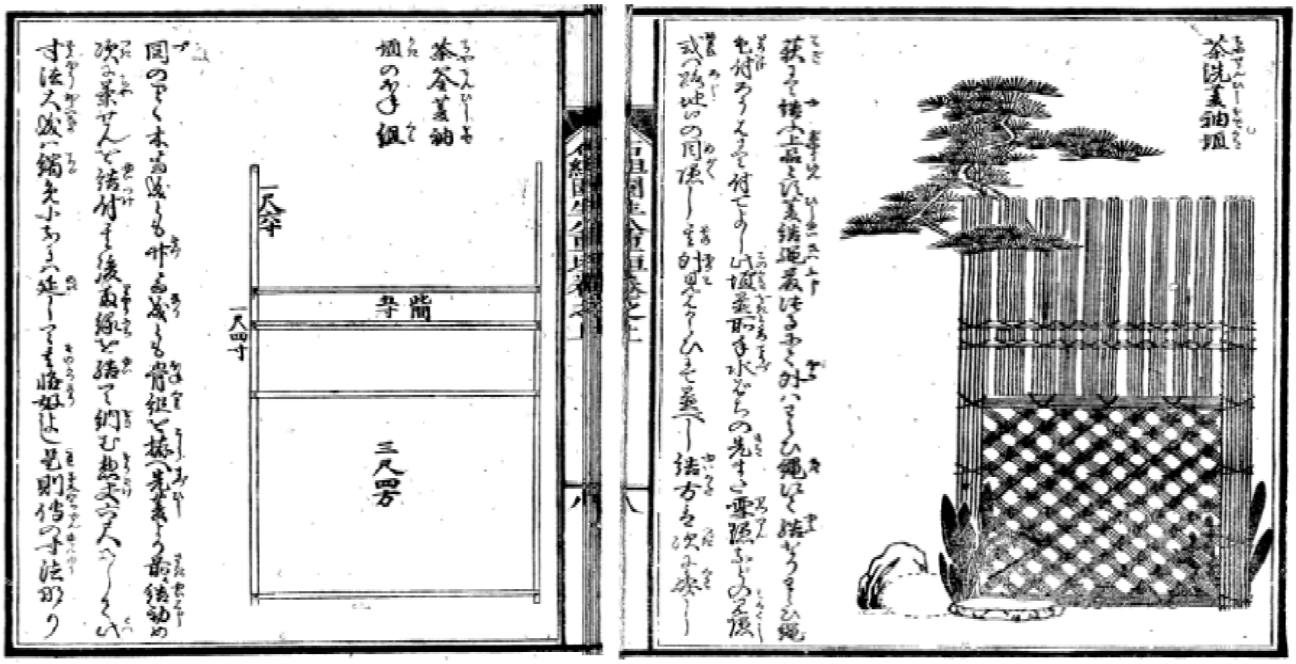
味深い。

まず、絵図を用いて作り方を示すが、さらにしかけられた工夫がある。最初の頁には垣根でも複雑な構造をもつ「八重垣之袖垣」図ただ一つのみを掲出し、その構造「八重垣之骨組」図はその裏頁に、裏から見た骨組み図として掲載しているのである。こうすることにより、本を透かして見れば、垣根の姿と構造とが表裏一体のものとして把握できる。

同様に、「八重垣之骨組」の左頁の「茶洗菱袖垣」(注・洗は筅の誤字ママ)の美しい姿の絵図に対応しては、次頁に「茶洗菱袖垣のほね組」として骨組寸法図を載せる。まさしく造るに必要な情報であるが、茶洗菱袖垣の完成形の風情を示す絵図には無粋である。その解説文には、垣根を結うための素材(結縄)の種類、垣根の相応しい場所を記し、次頁の「ほね組」図には骨組の素材、結い方などそれぞれ必要情報を添えている。

よく絵図を見てみると、図は庭先の風情をも伝えようとしていること、流麗な毛筆草書風の文章との配置バランスもよく、絵図観賞にも相応しい質を備えていることに気づく。

こうした、和綴じ本ならではの面白い工夫は次の「高麗垣之図」までで、この後からは同一頁に骨組みを画くもの七種の他は、垣根や木戸など



茶洗菱袖垣(裏·表)(＊)

高麗垣之図(＊)

の姿図を掲載している。これは、最初の三つの垣根の骨組みが基本構造であることを意味し、また寸法の基本も一図に示し、あとは文中で補足するだけなのは、素材感をも画きこんだ姿図がしっかりとしているので、あとは類推せよということか。

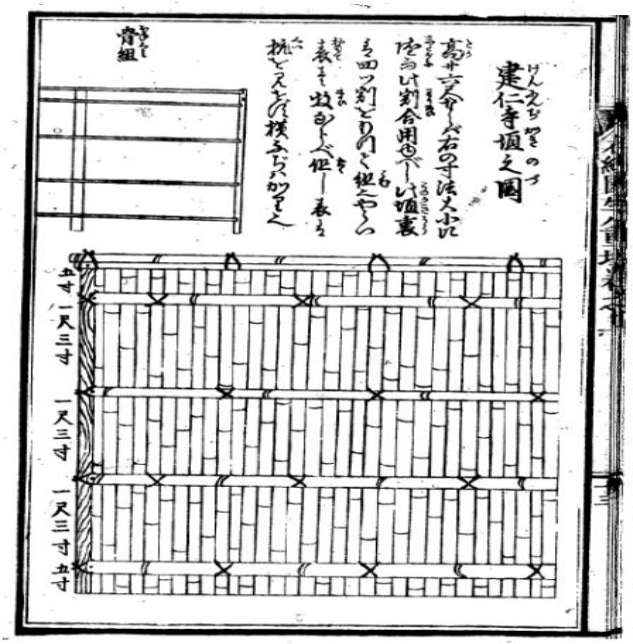
垣根の寸法については、やはり垣根とその垣根が置かれる状況、すなわち袖垣であれば、濡縁、縁先手水鉢、石灯篭、そして根じめ植栽などとのバランスを重視していることが、載せられた絵図が垣根単体のみではなく、袖垣として機能している状況を描いていることからも、知ることができる。垣根の解説では、寸法は延び縮みさせて「恰好よく仕上げる」べきことを強調している。

また、骨組・寸法の入った図を掲載した後に続く「沼津垣」「鳥居垣の図」の見開き頁では、垣根と茶室、待合そして植栽などとの配置や、それらの相互関係が図示されていることからも、「法(ほう)は・・」として標準寸法(法)を示すが、垣根に取り合わせるものや周辺環境により、その寸法・バランスを変化させ、「恰好よく仕上げる」べきであるとの意図が、この絵図から理解される。

ちなみに、乾巻の垣根作り解説には「法にいわく」「法に曰」として寸法を〇尺〇寸と記述する表現が多い。ただしその一方で、「此寸法大成は縮め小なるは延して其恰好よし是則伝の寸法なり」「是を定方として大小ともに此寸法を延縮めて恰好を取べし」「・・其外見計何にても工夫に任べし」「其丈恰好見はからひまず図のごとく・・」「低くもちゆる時此垣造るべからず、恰好せざる也、余は見はからひ第一なり」「・・・随分大なる程恰好よし」「寸法は極りなし恰好図のごとし」「・・しかし長短は処の恰好にしたがって・・」「・・倍増しの巾にて大体恰好よし」。

寸法やバランスは、「恰好よし」に周囲と見計らい、「恰好よく」仕上げることを各所で強調している。

この本のデザイン書としての一面である。



建仁寺垣の解説(＊)

襖垣の解説(＊)

沼津垣(＊)

鳥居垣の図(＊)

編集の工夫と観賞の楽しみ

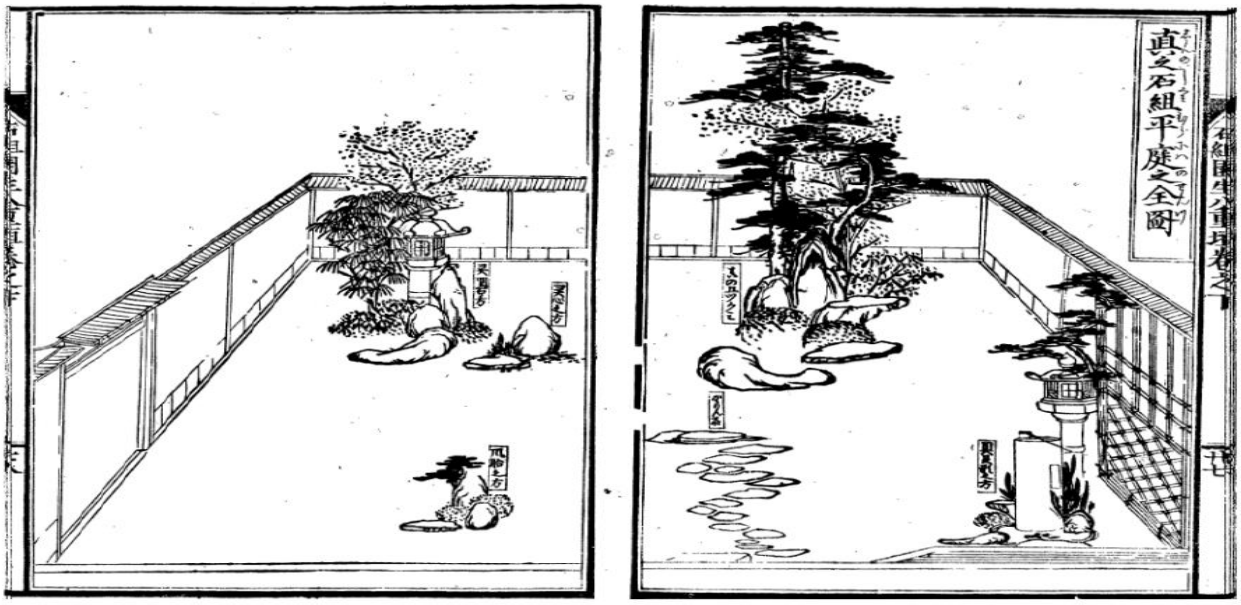
乾巻(上巻)冒頭にて、この本出版の意図を十分に伝えた後に続く三十八種の図は、ほぼ立面図を主とした姿図で、骨組図は同一頁に補足的に添えられる六点のみである。この部分のみ頁を括っていくと、垣根・庭木戸のパターンブック、カタログのようにも見えるが、前段からの続きとして読み進めば、「絵図をあらわし、その結方ひとつひとつに教え、自ら造ることをさとし」ていることが了解されよう。乾巻はこの垣根シリーズの後に、巻末に橋を五種類あげて終えている。両面見開きで画かれる橋はその前の頁までが、垣根や戸の単体カタログ的な構成であったことから転じて、庭の一光景を描き出す中に橋を入れ込み、絵図としても観賞して楽しめる構成としている。

坤巻(下巻)は橋の続きで始まり、冒頭の見開き頁に「八ツ橋之図」「柴太橋之図」(そだはしのず)。続いて同じく、見開きで橋を主景とした庭の絵図が二場面続き、読者を楽しませてくれる。あとはまた、木戸・門の単体をカタログ的に配した頁が続いている。このように、読者を飽きさせない編集方針がとられているのである。

この橋の紹介が終わったところで、さらに巻末に向けては「奥にはまた庭に用ゆる品をことどとく教ゆる」べく、庭石・石組、軒内・飛石・延段、つく

八ツ橋之図(＊)

柴太橋之図(＊)

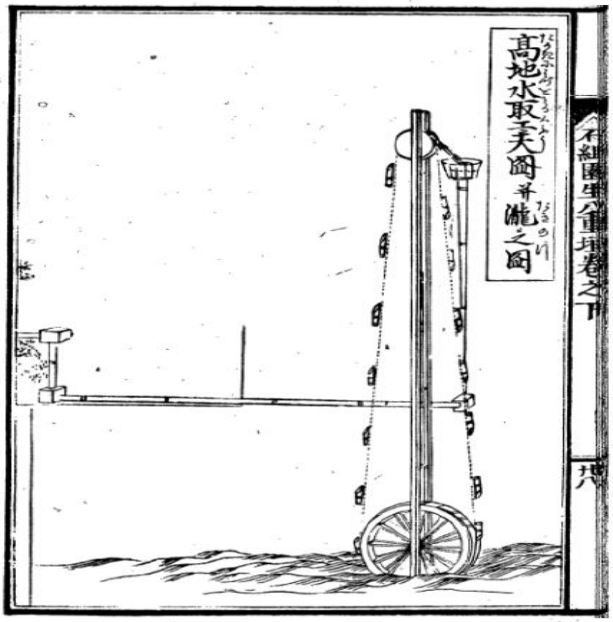


真石組平庭之図(＊)

ばい・水鉢、石灯篭などがほぼ単体として掲載される。これらの図の絵姿も見て楽しいが、その後に続き、巻の最後のほうでは石組による庭の姿を画く「築山全形組石賦割之図」(つきやまぜんぎょうくみいしふわりのず)「真石組平庭之全図」(しんのいしくみひらにわのぜんず)を載せてクライマックスとしている。

その後には、補遺のように見えるまとめの頁が四頁ほど続く。まずはここに掲げた「高地水取工夫図并滝之図」があり、滝の水をくみ上げる装置の材料・寸法など「道具拵之事」(どうぐこしらえのこと)を合わせて、技術書としての最後を飾る。絵図の最終頁は見開きの二図「同石陰陽之組方之図」「内庭手水鉢之図」(うちにわちょうずばちのず)である。石組の図は、石組による心得(デザイン)の極意を最後に語っているかのようでもある。そして、最後の絵図は庭から内庭へ、手水で身を清めて家屋の中へ入る状況を画いている。

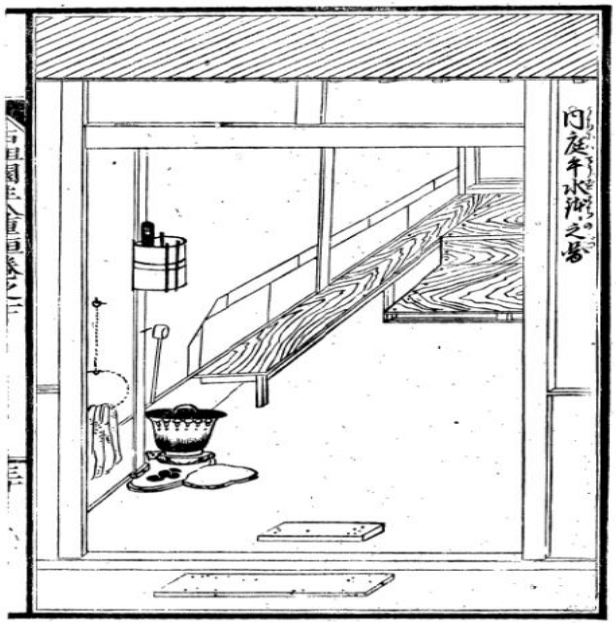
庭をめぐるこの本最後の頁は、外庭から内庭へ、屋内へといざなう設え「上がり口」であるから、すなわち「上がりでお終い」を意味するのだろう。



高地水取工夫図并滝之図(＊)

道具拵之事(＊)

同石陰陽之組方之図(＊)



内庭手水鉢之図(＊)

頁をめくった巻末には、「庭造解」として庭造りの心、といったものを文章で解説し、次の三つの歌を添えて終えている。

築山伝歌

そのままにあるこそすくなに姿なれ
　造らぬすがたつくれ築山

平庭伝歌

浪にふすかもめと見ゆる島々に
　春のあしたを霞む海はら

茶庭伝歌

かしの木のもみちぬからに散りつもる
　おく山さとのみちのさびしさ

以上、『石組園生八重垣伝』を垣根や庭石などのカタログとの評価ではなく、自ら造ることのできる学習テキストとしての利用や、その編集から絵図を楽しむ版本としての面白さを兼ね備えたものとして再読してみた。技術書・デザイン書を超え、観賞しても楽しめるこの本に興味は尽きず、秋里の生きた文化・文政の頃、「庭園文化」の花開いた江戸時代が偲ばれる。

造園科学科　教授　鈴木誠

追悼

名誉教授　内村　泰先生が七月三十日に、永眠されました。先生は、教育後援会発行の『農大学報』に十回の連載で農大の歴史を紐解くご寄稿をされていました。これは農大創立一二五周年に完成するように書き綴って来られたものです。また、小誌にも収穫祭について二編、自動車神社については前号でご寄稿いただきました。いずれも大学史資料室に籠り、資料を丁寧に調べて執筆されたものです。その後ろ姿や、掘り出し物の資料を発見された時の歓喜の声は忘れることができません。この様な活動のお手伝いができたことを光栄に思います。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

内村先生ありがとうございました。

＊本文中で＊印の付いている資料は当大学史資料室の所蔵資料です。

当資料室では東京農業大学史に関する資料をひろく収集しております。東京農業大学史関係資料や、各種情報などがございましたら、どのようなことでも結構ですので、左記までご一報くだされば幸いです。

東京農業大学
図書館　大学史資料室
〒156-8502
東京都世田谷区桜丘1-1-1
電話：03-5477-2526
FAX：03-5477-2546